算盤組立職人

Vol.05 師匠と会う

「簡潔に言うとだな、『ヤバい』」

「そんなに『ヤバい』のか…？」

「その通りだ佐藤くん、あれは『ヤバい』」

「なら詳しく聞かせてもらおうか、その『ヤバさ』とやらを」

「まず第一印象は、『笑顔の爽やかな翁』なのだよ」

…ほほう。

「立ち居振る舞いに全く死角がない。油断してるとこちらがやられる」

…む？

「こちらの話しをキチンと聞いて、誰であっても丁寧に回答している」

…？

「話しがうますぎて面白い！な、『ヤバい』だろ！！」

ポク

ポク

ポク

チーン！

「なるほど、それは『ヤバい』な。ただ、違う意味で、な。」

普段人を褒めることのない彼が絶賛するほどの凄い人なのだろう。今まで散々な経験をしてきたから、少し話しただけで何となく人の事が見えるんだろうな。相変わらず凄いヤツだ。

「まず紋切り型の自己紹介をしてから、いきなりだよ」

「おう、何をしたんだ？」

「小刀と竹と穴のあいた木材を渡されて、」

「ふむ」

「コマを作れ、と。」

「んな、実技試験か！？」

「恐らく、というか100%そうだな。」

…小刀位使えないヤツは帰れ、ということだろう。

まあ彼ならそれ位なんともなしにやってのけるんだろうな、俺には全く真似できんわ。

「その翁はすげー簡単にコマを作るんだよ！」

「そりゃあ木工のプロだからだろうな。」

「そんなのを見せられたら燃えるわけだよ、佐藤くん」

自分ではバレてないと思っているようだが、彼はかなりの負けず嫌いな性格なのだ。

「手元でやってる事をじっくりと見てから、サクッと作ってやりましたよ。フフーン」

「そんなにすんなりできるなんて思われてなかったんじゃないのか？」

「そうみたいだったよ。ただ、『これぐらいできて当然だ、若造よ』みたいな雰囲気だったよ。」

達人同士の立ち合いか、これは？

「その後は和やかに回っているコマに色付けして楽しんだよ。」

「…楽しそうな現場だな。」

「てことで、明日から行く事になったよー」

彼のこの急展開さ加減に関して、当たり前過ぎてもう何も言うまい。

profire 高山辰則(龍雲)

2014年より、伝統工芸士/宮本一廣氏のもとで修業。

2015年に播州小野算盤工房shinを立ち上げる。

「全ての人ではなく、できるだけ多くの人に気に入ってもらえる商品を作れ」という師の言葉を継承し、伝統的工芸品づくりを通じて、その歴史や技術を後世に伝えるために日々努力をしています。

播州小野算盤工房shin / 高山辰則(龍雲)

https://tkymtatz.wixsite.com/abacus